

青春失格ちゃん

登場人物

女A

女B

(もしくは1人)

部屋。

女A 私の青春は全部この本の中に詰まっている。

女B 私の青春は全部この部屋の中に詰まっている。

女A、本を開く。

女B、部屋の隅に座る。

女A 高校生になった私の最初の初恋は、担任の中本先生だった。背が高くてスリムで格好良くて、切れ長の眼で生徒を見つめては、優しい言葉で私たちを感動させた。浅黒い肌白いポロシャツがよく映えて、丈の足りない緑色のジャージをおしゃれに着こなすナイスガイな先生だった。演劇部の部屋に遠回りして向かうと、職員室から出てくる中本先生に出会える。テニス部顧問の中本先生はピンク色のバンドナを額につけて、ピンク色のリストバンドをつけて、浅黒い肌のにじませた汗を真っ白なタオルでさっとふき取っては小さく息を吐いた。

女B 「君たちも今から部活？」

女A はい。

女B 「大会近いんだよね。頑張ってるね」

女A はい。……というたつた2往復の会話を私は毎日楽しみに遠回りした。中本先生と話せた日は何があってもいい日だった。私は多分きれいに通っているだろう、先生の鼻筋を想像した。部活が終わるころ、あの鼻の先に夕日が刺して、紫色の影ができる。いつかその影を踏む、そんな日を想像した。明日は2人きりで会えるかもしれない。明日は3往復の会話ができるかもしれない。3往復目はどんな言葉で始まるだろう。

女B 「あれ？ 髪型変えた？」

女A はい。

女B 「素敵だね」

女A はい。……なんてことになったら4往復目に突入しちゃうかもしれない、そうなん

たらその日の私は最高にいい日だ、例えば次の日が毎時間テストでも、それも毎時間体力テストで毎時間シャトルランで毎時間ゼロからのスタートでも笑って何往復でもして見せる。私と先生のたった4往復の会話は、シャトルランの何十往復にも満たないだろう。私と先生の4往復の会話は私が通学路を何十往復もして手に入れた最高で最強で最果ての時間だ。そうして先生と私はそのうち、5往復目の会話を、その時のために私はまた何十往復も通学路を歩き続けるのだ。

女B

という作品を書いた。それは新入生のための小さな発表会で使われた。2列に並んだ先輩たちの顔が笑い声と共に上下に揺れた、それは大きな口が笑っているようにも見えた。実際のところ中本先生は小太りで汗っかきなおじさんで、顔の肉が圧迫して目が小さく見えていたし、白いシャツも緑色のジャージも、足りないのは横幅の問題だったし、ピンク色のバンダナとリストバンドは奥さんの趣味だった。ただ、鼻筋だけは想像通りだったのかもしれない。私は中本先生の鼻筋に恋をした。そういう作品を書いた。

女A

晴れて演劇部に入った私の2度目の初恋は、3年生の中本先輩だった。先輩はどの舞台でも主役に抜擢される演技力の持ち主で、舞台上で先輩の声はよく響き、長い手足はスポットライトに照らされてきらきら輝いていた。先輩はストイックだったので、台本を受け取ったら一番に台詞を覚えてきたし、いつも遅くまで練習して一番最後に帰っていた。私も最後まで練習して、一番最後に先輩と部室の鍵を閉めた。

女B

「いつも遅くまで付き合わせちゃって、ごめんね」

女A

いえ、私が練習したいだけなんです。

女B

「夜遅いし、家まで送るよ」

女A

ありがとうございます。……というお決まりのやり取りをしては2人で学校を出た。暗い歩道を歩きながら、他愛のない話をポツポツとした。時折通り過ぎる車がスポットライトの様に先輩の横顔を追いかけては追い抜いていった。私は先輩に存在するであろう下半分の横顔を思い浮かべては、恥ずかしくなって顔を伏せた。中本先輩の横顔の下半分は、まだ1年生の誰にも暴かれていなかった。それは暑い日にだけ揺める先輩の引き締まったお腹よりも、もっと貴重な絶対領域だった。私は毎日部活に行った。雨の日も風の日も暑い日も寒い日も女の子の日も休まず学校に通った。きっと私は先輩の最後の公演と一緒に舞台上に立つだろう。きっと立って見せる。そうしたら本番の直前に、私は袖あかりの薄暗い舞台裏で先輩の横顔を独り占めできるのだ。

女B

という作品を書いた。それは次の大会の台本を決めるときみんなに読んでもらった。一列に並んだみんなの横顔は目線だけが忙しなく動いていて、面白いのかつまらないのかも分からないまま、私はただ沈黙して待つしかなかった。その頃、私たちは誰も休まず部活に通っていた。雨の日も風の日も暑い日も寒い日も女の子の

日も、休まず学校に通った。私たちは完全に完璧な学校生活を送ろうとしていた。あの時、学校を休んだら、私の青春はそこで終わるかもしれないなかった。だから私の作品も演劇部の全員が読んでいた。演劇部には女子しかいなかった。だから中本先輩のモデルは女の先輩だった。演技がうまくて声がよく響いて、手足の長いストイックな先輩だった。ただ、先輩の横顔は最後まで暴くことができなかった。だから、下半分の横顔だけは私の想像で書いた。私は中本先輩の下半分の横顔に恋をした。そういう作品を書いた。

女A　　そういう作品を何本も書いた。

女B　　そういう作品を何本も書いては、友達に読ませたり話して聞かせたりした。

女A　　友達の中本さんは私の話を楽しそうに聞いてくれたし、台本を渡すと真剣に読んでくれた。私は中本さんの視線が動くのを眼で追っては、ドキドキするような、うずうずするような、モジモジするようなそんな心持ちでじっと待った。最後のページを読み終えた中本さんが、顔を上げて、きつと緩んでいるであろう唇が動いて「面白いね」

女A　　と言ってくれるのをじつと待っていた。

女B　　という作品もかいた。それは時折中本さんに読ませる台本のひとつだった。中本さんは私の話を頭から終わりまでじつと聞いてくれた。私が話せることなんて演劇か昨日の晩御飯か中本先生のバンドナのバリエーションの数ぐらいなものだったけれど、私は一生懸命話した。

女A　　そして一生懸命聞いた。きつと中本さんも、一生懸命に話していたと思うから。私と中本さんの何往復かの会話は、中本先生との4往復の会話よりも平凡でありふれた何でもないものだったけれど、平穩で大切に必要なものだった。私は中本さんの見えない唇の代わりに目を見つめていた。

女B　　でも、たまに億劫になっちゃった？

女A　　え？

女B　　たまに億劫になっちゃった？

女A　　なに？

女B　　いいよ、もう。

女A　　あ……ごめん。

女B　　中本さんが私の話を聞いてくれていたのかは分からない。中本さんは相槌を打ってくれたし、時折声を上げて笑ってくれたけれど、きつとあれは嘘だったんじゃないかと思う。私が本当に中本さんの話を聞いていたのか、私には分からない。私は一生懸命相槌をうった。時折声を上げて笑った。でも、きつとあれは嘘だったんじゃないかと思う。私と中本さんの何往復かの会話は、中本先生との4往復の会話より窮屈で難しくて疲れるものだった。私たちはいつもお互いの見えない唇の代わりに目を見つめていた。目を凝らしていた。でもそれだってやっぱり、分かるのは

お互いの半分までだった。ただ、きれいに弧を描いただろう中本さんの唇は、私の想像通りだったかもしれない。私は中本さんの唇に恋をした。それは私の3度目の初恋だった。そういう話を書いた。

女A 私の4度目の初恋は保健室の中本先生だった。桜は綺麗に咲いて後輩もできたけれど大会は中止になって部活も無くなったので、私は保健室に通っていた。保健室の中本先生は髪が長くて手の指が細くて姿勢の良い先生だった。毎日毎日私が来るたびに、先生は、

女B 「いらっしやい」

女A と言って招き入れてくれた。私は毎日毎日黙りこくって毛布にくるまって椅子に座って、先生をぼーっと眺めていた。

女B 「なあに？」

女A なんでもない。

女B 「どうしたの？」

女A うん……あのさ。

女B 「なに？」

女A 遠くに引っ越さない？

女B 「ええ？ ……どうしようかなあ」

女A やっぱり、いい。

女B 「いいの？」

女A うん。……と、やっぱり先生をぼーっと眺めていた。多分あの時先生は優しく笑いかけてくれた。私は先生の頬が少しだけ動くのを想像して、安心する。私は先生の頬に恋をした。

女B そういう話も書いた。多分先生は、本当は笑ってなんかいなかったんじゃないかと思う。そもそも人間に頬を動かす力があるんだろうか、仮にあったとしても、人間に微笑むという仕草がこの先も必要なんだろうか、私は考え始めていた。私は中本先生が笑った時に少しだけ動くはずの先生の頬に恋をするけれど、それは故意に作られた私の想像で、乞い願うだけの虚空なんじゃないかな。私が恋した鼻筋も横顔も唇も頬も、本当は無いんじゃないかな。

女A 私の5度目の初恋は後輩の中本君だった。

女B その頃私には学校中の人が全員同じに見えてきたので、学校中の人を「中本1」「中本2」「中本3」で数えていた。中本君は「中本24」だった。

女A 中本君は元気がよくて、真面目で素直な男の子だった。

女B それは写真から私が勝手に想像した中本君だった。

女A 私はタイムラインを何度も往復しては、中本君に手を振った。

女B それはハートのマークに赤い色を付けるだけの簡単な作業だった。

女A すると中本君は小さく手を振ってくれた。

女B それはハートのマークに数字が付くだけの単調なラブレターだった。

女A 私は誰にでも愛を振舞った。

女B それはハートのマークを赤く染めていくだけの簡単な作業だった。

女A 部活が再開されたので私は中本君に会えるようになった。中本君が私の想像通りの男の子だったかは分からない。私は役者で、中本君は裏方だった。私は素顔を晒さないまま舞台に立った。私は舞台上立って他人を演じた。中本君の前で他人を演じた。舞台上の中本14と中本17と中本25を、「吉田さん」と呼び「佐伯君」と呼び「田中先輩」と呼び、私は「三浦さん」と呼ばれた。中本君にとって私は「三浦さん」だった。私にとって中本君は「中本24」だった。家に帰るとすぐさまスマホを握り、中本君のハートを染めた。いくつもいくつもハートを染めた。中本君も私にハートを送ってくれた。よっぽどの間違いが起きなければ、多分私たちは両思いだった。私は中本君のシュツとした顎のラインを想像しては、顔がにやけた。きつと私はそのうち中本君の家に行く。親は仕事で、家には中本君と私しかない。私たちはようやく素顔のまま、裸の笑顔を見せあうのだろう。

女B そんな作品を書いた。

スマホが鳴る。2人、スマホを見つめる。

女B それは、私たちが大会に出られなくなったという連絡を受ける前の日まで書いていた作品だった。

女A 次の日から部活はまた休みになった。私は通学路を往復することもなくなり、中本先生にも中本さんにも中本先生にも中本君にもその他大勢の中本たちにも会うことは無くなった。中本君は連絡網から名前が消えた。私のスマホからも中本君は消えた。私のスマホから中本君は消えたけれど、中本君の話をする人は増えた。中本君を探す人、中本君さよならを言う人、中本君を励ます人、中本君を可哀そうがる人、中本君を罵倒する人、中本君を非難する人、中本君をバカにする人、中本君に興味のない人、中本君から世界を見る人、中本君、中本君、中本君、なかもとくん。私のスマホから中本君は消えたけれど、私のスマホには中本君があふれ出した。私は中本君について語る人たちのハートを赤く染めた。毎日、いくつものハートを染めた。私の染めたハートがいつか束になって中本君に届けばいいと思って染めた。中本君について話す全ての人に赤いハートを送った。

女B そうして私が私のハートをひどく価値のないものにしたことを私は自分で分かっているし、そんなことをして中本君が喜ぶはずがないこともなんとなく分かっていたけれど、だってそもそも、私は中本君の顔の区別のつかないようなひどい奴だったし、ただ誰かに恋をしたくて故意に乞い願っていただけなのだから、そんなことはどうだってよかった。私は私のハートを、自分の指先で潰して回っていたんだ。

血を吸った後の蚊を潰すみたいに、指先で軽く押すだけでハートは簡単に赤く染まった。私は私のハートをひとつずつ、押し殺して回る。中本君がどんな人だったかなんて、もうすっかり忘れてしまっていた。ただ、彼のシュツとした顎のラインは私の想像通りだったかもしれない。私は中本君の顎のラインに恋をした。そういう作品を書いた。

女A そう言う作品をいくつも書いた。

女B そういう作品にすべて書いた。

女A 私の青春は全部この本の中に詰まっている。

女B 私の青春は全部この部屋の中に詰まっている。

女A、本を開く。

女B、部屋の隅に座る。

女A 私の6度目の初恋は、向かいのお家で飼っていた犬のジョンだった。その頃人間にすっかり嫌気がさしていた私は、犬になら素顔を晒せるんじゃないかと考えていた。私は両親と向かいのおばさんの居ない時間を見つけては、ジョンに会いに行つた。ジョンは中本先生のように鼻筋が通って、中本先輩のように横顔がステキで、中本さんの様に唇が薄く、中本先生の様に頬のかわいらしい中本君の様にシュツとした顎のシバイヌだった。ジョンは私の話をよく聞いてくれた。ジョンは滅多にほえなかった。私は何度か、ジョンと鼻をくっつけてキスをした。ジョンは本当に大人しかった。はしゃぐとも、怒るともない、どっしりと構えるいい男だった。

女B ジョンに会いに行く前はいつも、鏡の前で身だしなみを整えた。私の顔の下半分は、ジョンに見せるためだけに存在した。ジョンだけは私の素顔を知っている。ジョンだけは素顔の私を見つめてくれた。そういう話を書いた。

女A 私はジョンと遠くへ引越そうかと考え始めていたけれど、そうする前にジョンは先に、どこかステキな場所に引越してしまった。寿命だった。ジョンは老犬だった。人間で言うとうと九〇才ぐらいのおじいちゃんだった。いやおばあちゃんだった。ジョンはメスだった。

女B 私はまた通学路を往復するようになった。学校では相変わらず中本たちが居たけれど、中本君の姿はなかった。中本君は遠いところに引越してしまった。私はいもう中本君の顔をすっかり忘れてしまっていた。

女A ねえ。

女B うん。

女A それって、ひどいかな。

女B ひどいよ。

女A ひどいか。

女B ひどいよ。最低だよ。クズだよ。

女A でも恋はしてたよ。

女B アンタが送った赤いハートの束に、中本君は殺されたんだ。

女A そうなの？

女B そうだよ。

女A それって、ひどいかな。

女B ひどいよ。最低だよ。クズだよ。人間じゃないよ。

女A 大会がなくなった演劇部に、文化祭で発表する機会が与えられた。私は舞台に立った。舞台に立つときだけ、私は素顔になれる。他人を演じるときだけ、私はホントの自分になれるんだ。私は一生懸命頑張った。一生分頑張るつもりで頑張った。私のほんの少しの人生分、頑張れるだけ頑張った。

女B 舞台上で私は何往復も何十往復も会話をした。私たちの会話は中本先生との4往復の会話より、中本さんとのたった1往復の会話より、ずっと簡単に気軽で穏やかで、それはどんな会話より意味のない嘘だったけれど、私たちはそれを楽しんだ。一生懸命楽しんだ。素顔の私は「三浦さん」だったけれど、素顔の中本14は「吉田さん」だし中本17は「佐伯君」だし中本25は「田中先輩」だったけれど、それが何だって言うんだ。私と中本14と中本17と中本25の何十往復の会話は、私たちが完全に完璧で完璧も感染もしないために通学路を何百往復も歩いて手に入れた最高で最強で最果ての時間だ。私たちはもう、1往復の会話もできないかもしれない。私たちの言葉は虚空の中に消えていく。

女A・B でもそれで構わなかった。もうどうでもよくなっていった。素顔の私は「三浦さん」だった。中本先生に恋したのはきつと三浦さんだった。中本先輩に恋したのも、中本さんに恋したのも、中本先生に恋したのも、中本君に、

女A 中本君に、恋したのも、乞い願って故意に殺したのも、多分三浦さんだった。

女B ただジョンに恋したのは私だったかもしれない。私の中身をジョンは知っていたし、ジョンに会っていた私はきつと元の私だった。きつと私は何者になっても、私はジョンのことを忘れないだろう。

女A 文化祭の日。本番の日。私の初めての本番の日。緊張と高揚感が疲労を吹き飛ばして、身体中の感覚全部が研ぎ澄まされる本番前。緞帳が下りた舞台の上で、私はじつとその時を待った。

女B 開演のブザーが鳴る。

女A 私は素顔を晒す。

女B 幕が上がる。

女A 幕が、上がった先に、私の視界を埋め尽くす白い、白い世界。暗いはずの観客席が、舞台から照らされて、反射して、目に飛び込んでくる。白い世界。何列も何列も奥までつながる白い、歯が並んでいた。たくさんの中本たちが、1本1本の歯に

なって、連なって、大きな口になって私に向いていた。素顔の私に向いていた。それは中本先生の、中本さんの、中本先輩の、中本君の、私の知らない中本の、顔の下半分なのかもしれない。

女B
その時、そう思った途端、急に不安になった。急に恥ずかしくなった。何がって、はっきりとは言えないけれど、だって私が恋して私が殺した中本たちの顔の下半分が一緒になって私を飲み込んでくるような気がして、責められるような気がして、恥ずかしくなって、すぐにでも逃げだしたかった。

女A・B
違う、私じゃない。三浦さんだよ。中本先生の鼻筋に恋したのも、中本先輩の横顔に恋したのも、中本さんの唇に恋したのも、中本先生の頬に恋したのも、中本君の顎に恋したのも、三浦さんであって私じゃない。私は三浦さんの代わりに話してただけで、私は三浦さんじゃないの。

女A
……と、私がいくら訴えたって中本の口は 聞いてくれやしなかった。何も返しやしなかった。中本の口の中で無数の眼が忙し なく私の身体をはい回った。

女B
ダメだね。

女A
どうして。

女B
白くないからだよ。白くないんじや、だめだよ。

女A
だめなの？

女B
ダメだよ。全然ダメだ。白くなきゃ、隠さなきゃ、人間じゃないよ。

女A
でも、中本君を殺したのは私だよ。

女B
だからだよ。

女A
出してよ。

女B
ダメだね。人間じゃないもの。

女A
ふざけんな！

女B
という話を書いた。

女A
……あれ？

女B
気がつくとは本番は終わっていた。倒れたのだと、中本さんが教えてくれた。

女A
幕は？

女B
幕？

女A
上がったんだよね？

女B
幕なんて、上がってないよ。

女A
そんな、だって。

女B
幕はね、まだ上げられないんだよ。

女A
どうして。

女B
まだ忘れてないから。

女A
まだ忘れられないの？

女B
まだ忘れたくないから。

女A いつ、忘れてくれる？

女B さあ、もう少し、かな。

女A そう。……みたいな話をしたことも、上がらなかつた幕の内側で起きたことも、私の7度の初恋も、全てはこの本の中に詰まっている。全部。ひとつ残らず。文化祭が終わって私はまた通学路を往復して、学校にはやっぱり中本たちがいて、でも中本君の姿は無くて、町を歩いてもお店に入ってもテレビを覗いてもどこもかしこも中本ばかりで、でもたぶん中本君の姿はなかった。

女B 遠いところに引越したんだよ、中本君は。

女A そう、だから、もういないはず、なんだ。それなのに、どうして探してるの？

女B ……？

女A いないよ、中本君は。どこにも。私が殺したんだから。

女B 中本君を殺したのは、三浦さんだよ。

女A ……という、話を書いた。

女B 多分、書いた。

女A 私は3年生になった。桜はまた綺麗に咲いて後輩も増えたけれど、誰がどれかなんてもう考えなくなった。三浦さんに全てを預けた私は空っぽになったので通学路を往復することをやめた。私は毎日鏡の前に立った。空っぽになった私の顔の下半分には虚空があるはずなのに、そこには鼻筋と唇と頬と顎があった。

女B ねえ、お母さん？

女A なにー？

女B 職場の人の素顔って見たことある？

女A 何言ってるの。あるに決まってるでしょ。

女B それってお母さんと同じだった？

女A 同じだったよ。

女B 全部？

女A 何？ また新しい話書いてるの？

女B ねえ、全部同じだった？

女A そうねえ、大体全部同じだったんじゃないかな。

女B 私とも？ 私とも全部同じだった？

女A そりゃあね。アンタだって、ちょっと前まで見てたじゃない。

女B もう忘れちゃったよ、そんなこと。

女A また見られるようになったら、すぐ思い出すよ。

女B もう忘れちゃってるよ、そんなの。顔も変わっちゃって、別人みたいになってるかもしれないし。

女A そうなったら、また「はじめまして」から始めればいいじゃない。

女B 無理！

女A 冗談冗談。大丈夫よ、またそのうち元に戻るよ。

女B 戻る？

女A そうそう。元の日常に。

女B そんなの……もう忘れちゃったのに、遠くへ行ってしまったのに、適当なこと言っ
てんじゃねえよバカ！ 私の青春を否定すんなクソツタレ！

女A なんかつたー？

女B なんにもー。

女A ……と、言っつて私は部屋に戻って、台本を書き始めた。

女B いつかどこかで素顔の中本君に出会えたとしても、私は気がつかないだろう。中本君もきつと、私に気がつかないと思う。私たちが完全に完璧で完結も感染もしないために通学路を何百往復も歩いて手に入れた最高で最強で最果ての時間も、そう遠くないうちに忘れてしまおうと思う。私の青春は虚空の中に消えていく。私の青春のどこまでが現実でどこからが創り話かなんてもう分かるはずもなかった。いつか中本先生のバンドナのバリエーションも、中本先輩と帰った通学路も、中本さんの緩んだ唇も、中本先生と遠くに引越そうとしたことも、中本君に赤いハートを送ったことも、全部全部忘れてしまおう。だから三浦さんに全部預けることにする。

私が覚えておけるのはジョンとした鼻先のキスしかないけれど、それだって消えてしまいかもしれないから、

女A だから私はここにいる。ずっとこの部屋の中にいる。もうすぐ消えてしまう私は私の代わりに私の青春をずっと覚えてる。この舞台の上でずっとあなたを待っている。あの日、上がらなかった幕の内側で、私だけが素顔を晒した。私の最後の初恋は、あの時舞台から見た、中本の顔の下半分だったと思う。彼らの笑い声と共に上下に揺れる歯が、忙しなく動いた目が、私に向けられて、不安で恥ずかしくて逃げ出した気持ちになったけれど、私だけが人間じゃなくなったらけれど、それだって私が欲しかった青春で、私が見たかったものだった。私が恋した私の青春、私が忘れていく私の上半分の思い出と下半分の空想の全て。

女B だから私は書いている。

女A だから私はここに居る。

女B 私の青春は全部この本の中に詰まっている。私のほしかった青春は全部この本の中に詰まっている。

女A 2023年2月某日。

女B 私の何もかも思い通りにいかなかった青春の話。

女A 終わるよ。

女B え。

女A 終わるよ、青春。

女B 無理。

女 A 無理って。
女 B だって、私、人の顔の覚え方も、分からない。
女 A でもハートを赤く染めることはできるよ。
女 B 私のハートは、初めから赤いよ。
女 A 引っ越す？
女 B 引っ越そうかなあ。
女 A 引っ越そうか。
女 B どこがいい？
女 A そうだね……。遠くかなあ。

暗転
おわり

ユニット・ピコ 演劇公演「青春失格ちゃん」

2023年 2月 25日/26日 クリエイティブ・スペース 赤れんが

「青春失格ちゃん」

脚本：中野志保

発行：ユニット・ピコ

MAIL unitpico@gmail.com

※ 上演希望の際は、必ずユニット・ピコまでお問い合わせください。